



ユ・ハイム

月刊 神戸のサッカー

1984

4月号

発行所 神戸市サッカー協会
神戸市中央区八幡通2-1-10
三木記念神戸市立スポーツ会館内
〒651 ☎ (078) 232-0753
発行人および編集人 一北 四郎
神戸市灘区上野通6丁目3-12
〒657 ☎ (078) 861-3100

毎月1回10日発行 購読料1部50円

ジャパン・カップ・ワールド・サッカー'84

ユニバー代表、 インテルナショナルに挑戦

5月30日(水)19:00 神戸中央球技場



マラドーナと並び賞されるウルグアイのルーベン・パス(インテルナショナル)

7年目を迎えたジャパン・カップ・ワールド・サッカーは今年、5月27日から6月5日まで全国8会場で行われる。今回は参加チームを3チームずつA、B2グループに分け、その上位2チームによる準決勝、決勝が行われる。参加するのはAグループにフランスのプロ、ツールのプロ、中国代表と日本代表、Bグループにアイルランド代表、ブラジルのプロ、インテルナショナル、そして来年神戸で開催されるユニバーシアードの日本代表の計6チーム。神戸中央球技場では、5月30日に一次リーグBグループ第2戦、日本ユニバーシアード代表対インテルナショナルの試合が行われる。日本代表のロス五輪予選敗退が決まった今、サッカーファンとしては、次代を担う日本ユニバー代表の活躍に大きな期待を寄せたい。

若手名手ぞろいのインテルナショナル

チーム紹介

●日本ユニバーシアード代表

来年8月から9月、神戸で開催されるユニバーシアードの日本代表チーム。「大学生のオリンピック」といわれるユニバーシアードだが、出場資格が現役の大学生に限らず「大学卒業後2年以内で28歳まで」となっているため今春卒業して日本リーグ入りした選手にもチャンスがある。代表候補選手はことし2月に第1次選考合宿に参加したばかりでチームとしてはまだまだ固まっていない状態。しかし、キャプテンにはブラジルへサッカー留学をした経験をもつDF松田浩(筑波大→マツダ)があげられており、上田亮三郎監督(大商大)、宇野 勝(東海大)の両首脳もこのジャパン・カップを通じてチームの中心プレーヤーを見極めていきたい考えだ。100メートル11秒台の俊足ストライカー浅岡(筑波大)、大型MF望月(大商大)など、人材にはこと欠かない大学サッカー界だけに期待は大きい。兵庫県出身の和田(御影高→順天大)、石末(伊丹北→東海大)の出場のチャンスも大いにある。

●インテルナショナル(ブラジル)

ブラジル南部の中心都市ポルトアレグレに本拠を置くブラジル屈指の名門チーム。1970年代に最強のチームを築き、ブラジル全国選手権3回、リオグランデスル州選手権28

回優勝という輝かしい記録を持っている。当時のチームの中心はブラジル代表のファルカン(現ASローマ)。現在はウルグアイのスーパースターで中盤のルーベン・パス(24歳)、19歳でこのチームのキャプテンとなったCBのマウロ・ガルボン(22歳)、昨年のワールドユース・メキシコ大会でブラジルを優勝に導いたドゥンガ(20歳)ら有能な若手と大ベテランのマリオ・セルジオ(33歳)——昨年12月トヨタカップでグレミオをクラブチーム世界一に導き、1月に移籍——が中心で再び70年代の栄光をとり戻そうとしている。

真っ赤なユニホームに身を包んだインテルナショナルは、全員攻撃の華麗なサッカーを神戸でも見せてくれるだろう。

選手のみどころ

ルーベン・パス(Ruben Paz)

79年ワールド・ユース東京大会で来日の経験がある。ウルグアイ代表の攻撃的ミッドフィールダー。テクニックは申し分なく、スピード、センスとも抜群でインテルナショナルの攻撃陣のリーダーとなっている。1982年初めにモンテビデオの「ベニャロール」から「SCインテルナショナル」へ移籍、2年契約の切れた今年2月にコロンビアの「アメリカ・カリ」へ移籍の予定だったが、交渉がまとまらず3月に入って「SCインテルナショナル」と再契約した。

ウルグアイ北部のアルディガスで生まれ、

早くから才能を注目されて「ベニャロール」に引き抜かれた。1977年の第1回ワールド・ユース大会に17歳で参加、1979年のワールド・ユース日本大会にもエースストライカーとして参加し、活躍した。同じ世代にアルゼンチンのマラドーナ、パラグアイのロメロがいて、南米の新世代を代表する三羽鳥として、その才能は定評のあるところ。

ウルグアイ代表として1980～81年のコパ・デ・オロに優勝、ウルグアイ・ユース代表で1979年南米ユース選手権大会優勝、「ベニャロール」で1978、79、81年ウルグアイ・チャンピオン、「S、C、インテルナショナル」で1982、83年リオグランデ・ド・スール州チャンピオン。

マウロ・ガルボン(Mauro Galvão)

インテルナショナルの若きキャプテン、ポルトアレグレで生まれ、子供のときからインテルナショナルの少年チームでプレーしていた。79年、17歳でブラジル全国選手権優勝チームの一員となり、まもなくリベロのレギュラーポジションを得てアイドルとなった。

1961年12月19日生まれというからまだ22歳になったばかりだが、19歳ですでにこのチームのキャプテンを務めていた。

非常にテクニックの優れた選手で、その将来性は申し分なく、若いころのファルカンと比較される。本人も「目標とする選手はファルカン」と語っている。

前売券発売場所

神戸新聞会館プレイガイド ☎078-221-9541
さんちかプレイガイド ☎078-332-1570
サッカーショップ加茂(神戸店) ☎078-392-0234
ヤノ運動具店 ☎078-391-1121
兵庫県サッカー協会 ☎078-232-4647
0753
阪神プレイガイド ☎06-347-6510
阪急プレイガイド ☎06-373-5446

ミカドスポーツ ☎06-341-0133
美津濃 ☎06-202-1171
サッカーショップ加茂(心斎橋店) ☎06-251-1875
サッカーショップ加茂(梅田店) ☎06-346-1212
サッカーショップ加茂(エスト店) ☎06-376-0166
サッカーショップ加茂(千里店) ☎06-813-5724
サッカーショップ加茂(京都店) ☎075-221-7679
ベンススポーツ(姫路) ☎0792-81-5897

入場料

S席……………¥ 3,000
A席(当日)……………¥ 2,000
A席(前売)……………¥ 1,500
B席・一般(バックスタンド立見席)(当日) ¥1,000
B席・一般(バックスタンド立見席)(前売) ¥800
B席・中高生(バックスタンド立見席)(前売) ¥500
B席・小学生(バックスタンド立見席)(前売) ¥300

日本サッカーに ルネサンスは起こるか?(12)

枚方FC 近江 達

荒唐の兆し

勝利だけが強調されると、ゲームは醜くなる。我々は、美しさの感じられる勝利を目標とすべきだ。——クラマー

日本サッカー界を一種の事業として眺めてみると、この場合、目的達成や利潤追求はさしずめ目の試合での勝利とか、大会優勝に相当するから、もし日本サッカー界が「とにかく勝ちさえすればいい。勝利以外に何があるかと言わない」と、理想も哲学もあらばこそ進二無二進んできた、と仮定するならば、ずっと続いてきた停滞は先ほどの法則にあてはまる当然の結果であって、現状から脱出浮上するには、サッカー界全体が勝利以外に何か哲学とか崇高な理想を持ち続けて、達成実現に努力しなければならない、ということになるだろう。

アンフェア・プレーとサッカーの将来についても、この法則は適用できると思う。

史上最低だったスペイン・ワールドカップでは、反則が頻発した。ドリブルやパスで抜かれると平然と相手の足を払う。接近すると手や肘を出す。シャツを引っ張る。偶然足がからまったような振りをして相手を痛めつけ倒す。冷酷、苛烈、執拗、しかも巧妙……。

世界中が楽しみにしている四年に一度のワールドカップである。素晴らしいゲーム、見事なプレーを見せて欲しいのに何たることか。将来ある少年たちがあの卑劣なプレーを見たのだ。暗澹たる気持ちに落ちこんでしまう。

そうしたプレーがせめて半分だったら、いかに低調といえども、そこは腐っても鯛、やはりワールドカップらしい面白い場面がいくつか見られたに違いない。

だが、もしそうなれば、勝敗が入れかわるケースが出てくるかもしれない。損をする方は、「だから、やっぱりアンフェアに戦う方が利口なんだよ」、とうそぶくに決まっている。

個々の場面では、平素の実力や名声がどうであれ、とにかく、その瞬間、その場所で、優れた方が勝ち、劣った方が負けるのだが、そこをファウルで切り抜いたり、ごまかしたり。レフェリーに見つからなかったら、やり得。見つかったって大したことない、と計算してかかる手合いも少なくない。

本格派になると、この程度にごまかし痛めつけられれば勝てると、作戦を立てて計画的にやる。彼らにとっても、非情かつ知的な秘策のひとつなのである。

是認派もいる。たとえば、マラドーナに対する妨害や挑発は、動機、目的、計画性、行為と立派に揃った犯罪だった。「犯罪」ではなく「反則」ですんだのは、ゲーム中、白線内

で行われたために過ぎない。だがそれでも、「マラドーナも反則を乗り越えるほど、まだ巧くはなかった」といった批評が散見される。

それは単なる理屈にすぎない。作戦行動なのだから、犯人が狙った獲物を逃すことはあり得ない。切り抜けたら、妨害はますます兇悪になる。ペレだって無傷ではすむまい。

反則は、危険防止以外に、相手にそんなことをされると、相当巧い選手でも充分なプレーが出来なくなってしまうという技術上の限界から、反則と決められているのだ。乗り越えられるくらいならルールを設けたりしない。

責められるべきは、仕掛けの選手であり、レフェリーであって、マラドーナの技術ではない。私はマラドーナのファンではないが、「やられる方の身になってみる」と言いたい。

いくら勝利が収入に直結するプロの宿命とはいえ、優れたものが勝ってこそ競技、つまりスポーツになるのである。あれでは本当の優劣が見られなくなる。ひいては、技術を磨き戦術を向上させたって無駄、骨折り損のくたびれ儲けだ、ということになってしまう。

そうして手段を選ばず、勝つことだけに血道を上げていけば、挙句の果てはどうなるか。次のワールドカップでますます汚いプレーがふえるようなら、もはや危険信号である。サッカーは死出の旅路へ自ら墓穴を掘ることになるだろう。

格闘技原点説に対する危惧

ラグビーは紳士がする
野獣のスポーツ、
サッカーは野獣がする
紳士のスポーツ。

わが国でも最近汚い卑劣なプレーがふえた。外国サッカーの悪い影響、学内暴力、少年非行の増加、低年齢化などの世相との関連に、もう一つ、格闘技原点説が一役買っているのではないかという気がする。

昔話になるが、今はなき旧制高校のインターハイは野蛮極まるものだった。何しろ先輩が、「相手のエース格の選手の足を狙って骨折させてしまえ」と指示するのだ。実際そうして骨折した選手が何人もいた。体当りは公認。ゴール前でもつれると両軍たちまち殺到して大乱闘。ガラの悪い選手などは好機到来とばかり、殴る、蹴る……。格闘技という文字を見るたびに、当時の光景がぼうふつと浮かんでくる。

言うまでもなく、格闘技スポーツとはレスリングやラグビー、高速のため衝突を避けられぬアイスホッケーなどのことである。

サッカーはショルダーチャージしか許されず、それ以外では、ボールをプレーする際に起こる止むを得ぬフェアな接触だけが目に見られているに過ぎないので、格闘技スポーツ

の中には入っていない。

それなのに何故サッカーの原点が格闘技なのかというと、大昔、野越え山越え町中暴れ回ってボールを追いかける原始的なゲームがあって、それが安全な近代スポーツ化されて、格闘技のラグビーと、技術性を骨子とするサッカーとに分化した、という歴史があるからである。

だが、今どき格闘技原点説が改めて格闘技に登場したのは、無論懐古趣味などではない。野性的で激しい外人に比べると、最近のわが国の若者がいかにも非闘争的でひ弱く見えて物足りぬために、たまりかねて飛び出したものらしい。

確かにもっと激しくてもいい。だが近頃のラフプレーの増加は気にかかる。流行ぶりを見ると、格闘技という言葉は、いまや大手を振って一人歩きをしているようである。

いくら「サッカーは格闘技スポーツではないけれども、格闘技の要素は必要だ」とか、「ルールの枠内で格闘技なんだ」と論理をつくして説いたところで、その通り過不足なく理解できる人は少ない。すでに相当多くの大人が「サッカーは格闘技だ」と受け取っている。ルールが明らかにそれを禁止しているにも関わらず、である。

それに、イザヤ・ベンダサンに指摘されるまでもなく、近頃の政界や世相で分ごとく、もともと日本人にはフェアプレーという理念はない。少し前までは、戦前からの武士道精神の名残りで、男らしく、正々堂々といった気骨が代りをしていたが、今はそれも消滅した。無法者が横行する下剋上の学内では、普通の少年たちでさえ集団で盛大に弱い者いじめをする。しかも何ら罪の意識がない。

こんな中で、サッカーで格闘技をやろうとする選手や指導者がふえることは、かなりの危険をはらんでいる。

58年の天皇杯決勝は、全員がひたむきにボールを見つめて終始ボールに食らいついたヤマハが優勝した。

ヤマハの激しさはボールを求めボールをプレーするために生れた。それに対して、読売もフジタも、相手にテクニカル・ファウルを仕掛けることに神経のかんりの部分を取られて、本末転倒。肝心のボールを見つめてプレーする方がお留守になり、勝利への集中が乱れ薄れて、負けてしまった。

サッカーを格闘技と取り違えたため、と言えないこともない。これまた哲学も理想もなく、何をしても勝てばすべてよし、とした結果、自ら破綻を招いた一例であろう。

サッカーは本来、選手の年齢とレベルに比例して激しくラフになっていかざるを得ないスポーツであり、格闘的プレーはほうって置いてもいざれ覚える必要悪である。まして、そのすぐ傍にサッカーの荒唐という落とし穴が待ち受けていることを思えば、何もわざわざ「格闘技」という誤解と弊害を招く刺激的な表現でけしかけることはないではないか。

サッカーの美しさを愛し、永遠の発展を祈るが故に言うのである。いつの時代でも、強調されるべきはフェアプレーの精神である。格闘技という言葉はサッカーにはいらぬ。激しくノ勇敢にノ男らしくノ身体を張れノそれだけで充分である。

明日の栄光を勝ちとれ!

markam®

80年代をリードする サッカーウェア

younger®

サッカーの基本プレーを徹底的に
追求し、機能性を第一に考えた
サッカーシューズ「マークカムシリーズ」

マークカム33

標準小売価格 ¥8,000



MONTBLANC. リアル・スポーツの追求
モンブラン株式会社
神戸・東京・福岡